東日本大震災　学童保育の一日も早い復旧・復興を願って㉒

岩手県・気仙地区「やどかり学童クラブ」からの報告

濱口 智
岩手県陸前高田市　やどかり学童クラブ　保護者

二〇一一年三月一一日、地震発生時、前年に「やどかり学童クラブ」から分割して開設したばかりの「リトル学童クラブ」では指導員さんたちが、間もなくやってくる子どもたちのために準備を進めていました。あまりの揺れの激しさに驚き、二階にあるクラブ室から建物の外に出たり、また戻ったりと、冷静ではいられなかったそうです。

常勤の指導員さんたちは、若い先生を真っ先に逃がし、高台の小学校内にある「やどかり学童クラブ」へと逃げました。「やどかり学童クラブ」でも、校舎の外壁にかけられた大きな時計が落ちてくるほどの揺れに驚き、運動場から一段高いところにあるクラブ室から外へ出て、運動場へ逃げる子どもたちの様子を見ていました。

学校へ迎えの車がつぎつぎにやってくるなか、近くの保育所に子どもさんをあずけていた指導員さんは、すぐに我が子を迎えに行き、そのまま低い所にある町をぬけて実家へと向かったそうです。別の指導員さんも小学生の子どもさんを迎えに行き、子どもさんと町のほうを見ていると、白っぽくかすんで見えた町から、砂煙のようなものが迫ってきたといいます。「逃げろっ！」という声を聞き、二人は運動場からつぎつぎに走ってくる子どもたちや、町から上がってくる人たちとともに、高台をめざして走りました。途中でふり返ると、家や電柱がバキバキと音をたてて倒れていく様が目に入ったそうです。この津波で、「リトル学童クラブ」は流失してしまいました。

その日から、学校の先生たちは、テンデンコに逃げた子どもたちの安否の確認を行い、指導員さんたちは、家が破壊されて泊まり込んだ方も含め、避難所で子どもたちの面倒をみる日が続きました。指導員さんのなかには、自分の子どもさんの安否を心配しながらも、食物アレルギーのある僕の息子のために、家から食料を持ってきてくれた方もいました。

壊滅的な町の状況に、人口の流出が続きました。二〇一一年四月初め、市役所の担当課の方から、「なんとか学童を再開してほしい」という悲痛な叫びのような依頼を受け、私たち役員と指導員さんは、集まりを持ちました。四月二〇日、学校の再開の日にあわせてなんとか再開したものの、水は出ず、遊び場は瓦礫に埋まったためにガラスの破片や釘などがつぎつぎに出てくる、学校のすぐ下には壊滅した町が無惨な姿をさらしている……という状態でした。

震災後、小学校全体の児童数は一〇〇人ほど減りました。一方、「やどかり学童クラブ」では、再開した当初は三〇人ほどだった子どもの人数が（「リトル学童クラブ」在籍の子どもも合同で保育）、その年の夏休みには七〇人ほどに、そして二〇一二年度には九〇人を超え、震災前に二つの学童クラブに通っていた子どもの人数をあわせた数より多くなってしまいました。学校からもう一教室、提供していただいたにもかかわらず、二〇一三年三月二〇日現在、震災の影響で業者が多忙なために必要な改装ができず、使用できていません。

高学年の子どもが指導員さんにそれまで以上に甘えてみたり、乱暴な行為をしてみたりと、震災前に比べて子どもたちはとても手がかかり、たくさんの配慮と気配りが必要です。指導員さんたちは、復帰した方もふくめ、子どもたちの気持ちにこたえようと、やさしく接してくれています。

二〇一二年一二月七日、午後五時過ぎに、津波注意報が発令されました。またしても、「やどかり学童クラブ」は大混乱に陥りました。地震が発生した直後から、一年生の子どもたちは恐怖で泣きはじめ、すぐに指導員さんたちは、子どもたちを高台へと避難誘導してくださいました。ところが、学校の避難マニュアルにしたがって逃げた道は昼間の避難を想定したものだったのか、真っ暗ななか、前日に降った雨の影響で足元は滑り、何度もひざをつき、すりむきながらの避難となりました。それでも、六年生の子どもたちは、自分たちも不安で涙が出てくるのをとめられないなか、一年生の子どもたちをはげましながら、指導員さんたちの補助をして避難したといいます。そうです。津波浸水地域の「やどかり学童クラブ」では、未だに、安全な避難路も確保されていないのが現状なのです。

こうした状況のため、「やどかり学童クラブ」では、これ以上の受け入れはできないと判断し、二〇一二年度には、入所希望があっても待機していただくという事態が発生してしまいました。新年度がどうなるのか、とても不安な毎日です。